

園のくらしを育む 1

幼児と自然(1) — 泥山に学ぶ —

秋田喜代美


1 はじめに — 分ける文化と育てる文化 —

本連載では、「園のくらし」をさまざまな観点から、私が出合ってきた事例をもとに書かせていただきますと思います。長田弘さんは『読書からはじまる』（NHKライブラリー 二〇〇六年）という著書の中で、「分ける文化と育てる文化」という言葉で現代の生活に対する警鐘を発しています。全国どこでもコンビニエンスストアで同じ物が手に入り、メガヒットといわれるCDや本が広く誰にでも分かちもたれる時代です。小学校以上の教育においても基礎基本の徹底ということ、誰もが国民教養としてもつべき知識や技能が等しく分かちもたれることが求められ、その獲得が学力テストで測定される時代になってきました。これは便利で効率的であり、かつ限られた経済投資の中で効果的な社会をつくり出すために不可欠な近代産業主義社会の仕組みです。

しかしもう一方で、地域に根ざし、手づくりの手仕事で熟成させ、人の確かな絆の中で育てていくローカルな文化があります。それは時間をかけ、地域のアイデンティティと誇りをつくり出し、ここに生きる者としての自覚をもった市民性を生み出していきます。時には不便さの中に対話が生まれることでゆるぎない智慧が育てられていくのです。私は幼稚園や保育所において子どもたちが経験するくらしは、分けることの重視ではなく、育てる文化の場であってほしい、豊かなくらしは簡便さではなく、心や手をかけ質を高めていくていねいな保育の中で初めて育てられるものだと思います。それはそこに共に暮らす保育者、子ども、保護者たちによって生み出され大事に育てられていく文化です。子どもに何が身についたか、どのような形式で評価するのかと結果へと急ぐ語りではなく、子どものくらしに常に立ち戻り、園の風土と文化を共に育て語り合っていきたいという思いから、この連載タイトルとさせていただきました。それは倉橋惣三の「生活を生活で生活へ」の思想へとつながる、日本の保育のこれからの歩みの方向ではないかと思っています。

2 保育の場としての泥山

東京大学で毎月行っている保育者や保育研究者の先生方との研究会も、この10年間で80回を超えました。今月は、成宮正哲先生（神奈川県／しらかば幼稚園）の泥山のDVD事例を視聴しながらみんなで語り合いました。五歳の男の子たちは、掘ったり水を流したりと、尽きることなく何か月も遊び続けています。興味深いのは、この五歳児が卒園して翌



年になると、入園直後の三歳児がこの泥山の魅力に引かれ、この場をわが物としていく姿でした。幼稚園の決まり事を学ぶ前に、子どもたちはおもしろいものに引き付けられます。そして裸足になっていきます。直感的に魅力的なのです。土や砂、水は本来的に子ども遊び用にデザインされたものではありません。お子様向けにかわいいものをといて発想で機能を絞り込んで作られた玩具は、子どもの心を束の間とらえることはあっても、人間としての複雑な能力を備えた子どもの心の奥に長く入り込むことはありません。

大地を形成する自然物の複雑さは、天候や季節、土の中に生きるさまざまな虫や植物などの生命、さまざまな石や枯れ木などとの出会いによって、人間の本来的な知的喜びを、身体感覚を通して呼び覚ましてくれます。身を置く場と操作の対象の一体化によって、解放感と挑戦があり、場に浸り込み、身をゆだねる遊びの真髄がもたらされます。泥山遊びや泥団子作りもまたその一部ですが、場も物も水や太陽や道具により変化をもたらしてくれます。

砂場は平地であるので、子どもたちは思い思いの向きでかかわることができます。しかし、泥山の斜面は子どもたちの姿勢を物理的に同じ方向に向けさせ、登れない子には自然に手が差し伸べられることで助け助けられ、登りきった満足感や降りるスリルが一体感を生み出します。水を流したり掘ったりすることで、土の硬さや山の傾斜度が常に変化します。これは滑り台やセメントで固められた遊び場にはない醍醐味です。

子どもたちが泥山の泥を掘り始める姿は、農耕や労働の始まりを思わせます。プラス

チツクのシャベルと小さなスコップなのでなかなか掘れません。大きな鉄のスコップを出したほうがよかったのではという意見が出されました。その意見が契機になって交わされたのは、いろいろな道具を使いながら、どの道具が便利であるかを子どもたち自身で見出ししていくことこそが大事という議論でした。泥山に水を運ぶのにも、子どもが使う物は最初は小さなカップからビンへとしだいに変化していきます。ある園では4リットルのポリタンクを泥山の脇に準備したそうです。水の重さの実感、一人で運べない時の助け合いなどが、一つの道具を通して生まれていきます。子どもの年齢に適した物だけを準備することが配慮ある環境なのだろうか、改めて考えさせられた時でした。

土や砂、水という自然物、山や穴という地面の起伏が子どもにもたらずもの、シンプルなほど複雑な遊びを生み出すこと、これは園のくらしで保障しなければ、現在の家庭生活では得られない経験です。ちなみに、この泥山は大きな山ではないのです。ちよつとした空間に、この数年間若い保育者の成宮さんが黙々と作ってこられた工夫です。ある都心の園長が言われました。「うちでも、限られた空間でも、土を入れたら子どもの目線から見る大きな変化が起こってきました」「穴や山づくりという起伏を考えたい」「園の人工芝は変えられないから、何ができるかいろいろ遊具でできる工夫と智恵を絞ってみたい」。

所与の環境から子どもの経験をいかに豊かな場にしていくのか、この絶え間ない心の刷新が明日の保育への力を保育者と子どもに与えてくれるのではないのでしょうか。

(東京大学大学院教授)